

「新潟市映画館史に見る都市の人間交流」

03K030 久志田 渉

はじめに

新潟市に、1985年から続く「新潟・市民映画館シネ・ウインド」（以下「ウインド」と略）という映画館がある。ある名画座の閉館を契機として、市民からの一口1万円の出資を集めて開館した「ウインド」は、以後その運営を、数え切れない無償スタッフが担ってきた（第5章参照）。同館は、資本や思想とは距離を置き、新潟市内外で文化活動を行なう人々が集う“サロン”的な性質を持っている。多様な年代・価値観を持つスタッフが自分の意志で、活動に従事している。私もこの映画館のスタッフとして多くの時間を過ごしてきた。上映会の企画や、雑誌編集、個性豊かな人々との付き合い。そうした過程で、まるで“風”的様に人々が集い、群れることのない共同体を作り上げた「ウインド」の存在に、強い興味が生じた。

「ウインド」では会報誌『月刊ウインド』の通巻250号達成（2006年8月）を記念して、新潟県内の映画館史編纂に取り組んでいる。発行を企画した代表・齋藤正行は、「映画上映の過去100年を見詰めることで、これまでのウインドの歩みを映画史から検証し、これから道を見付ける」ことを意図し、有志スタッフに内容・編集が全任されている。この『映画館史』編集スタッフとしての活動は、私に過去の映画上映の豊かさと、「映画」による人と人の結び付きの原点について考える時間を与えてくれた。

本論では、新潟市を中心とした映画館及び映画自主上映の歴史をたどりながら、「映画」による市民の交流を考察している。その上で重要なのは、①映画館、映画上映の歴史を時系列に沿って論述する、②映画館及び自主上映運動と関わりを持って生きてきた“市民”的視点から歴史を見詰める、という2点である。

第1点だが、映画の上映形態は、時代毎に風貌を変えている。加藤幹郎は「『映画は不特定多数の人たちと時間や感動を共有するもの』という言辞も、映画がその最初期から覗きカラクリのように個人で楽しむ娯楽としての要素を含みつつ発展して来た歴史を把握しなければ、説得力がなくなる」という趣旨を記しているが⁽¹⁾、映画といっても、若い世代と日本映画全盛期（1950～60年代）を過ごした人との間には、認識の“溝”がある。また、生活と密着し商業価値を有していた映画が、斜陽期（1960年代後半～70年代）⁽²⁾を経て、市民による文化振興の媒介へと変化した過程を分析するには、その歩みを時代に沿って見詰める必要がある。

第2点に関しては、「なぜ、映画作品の歴史に重点が置かれ、映画館や映画を楽しんできた人たちの記録は少ないのだろう」という疑問が根底にある⁽³⁾。「ウインド」スタッフとして、私は「映画」を核とする新潟市内外の人と人とのつながりや、文化に取り組む個性的な人々を知った。こうした存在が、どれだけ記録されてきたといえるだろう。「ウインド」前副支配人・井上綾子さんは「映画の製作から上映に至る過程には大勢の人が関わっている。監督や俳優だけでなく現場のスタッフや、企画、宣伝なども含めた関わる人それぞれに担うものがあって、お客様に観ていただいて映画は初めて完成する」と語っている。映画史は「映画作品」や「映画監督・俳優」の分析に比重が置かれ、映画を上映した人々、映画を楽しんだ市民への考察が乏しかった。映画を楽しむ観客にも、「娯楽」として接する人や、「芸術」と捉える人もいるし、観客という立場を大切にする人、上映や映画制作に足を踏み入れる人と、様々なスタイルがある。「観客」という言葉で一概に括れない人々こそ、映画を支えてきた大きな存在ではないか。彼等とその繋がりから新潟の映画上映史を検証することで、今までの映画史とは異なった、小さくとも素敵な価値観を見出せるのでは、という希望がある。

その一方で、シネ・ウインドでの「映画館史」編集作業や「にいがた映画塾」（第7章参照）などによる都

市振興に参加する過程で、(観客にとって) 映画が娯楽に留まらず、生きる力や交流を生み出していた過去と、人々にとって映画や映画制作が個人的な興味・娯楽の対象と定義できる現代との対比を、私は鮮明に感じるようになった。映画監督・手塚真さんが語った「東京でも映画館に若い人が出かける事が少なくなったし、自分の会社で映像を製作してくれる若い子も驚くほど映画を観ていない。映画を観なくても、映画を作れるようになっているんだね」という言葉を想起するような経験を、私は味わった。若い世代に限らず、人々は街へ出かけ、他者と関係を築くことを必要としているのだろうか。

1980年代のビデオ普及や1990年代のシネマコンプレックス登場により、街に多くの映画館が存在し、「日常」と「映画」とが結び付いていた状況は、性質の変化を繰り返した。現在、「映画」 = 「映画館で大勢の人たちと、感動を共有するもの」という価値観は、絶対ではない。1980年代に「カウチポテト」という言葉が注目された。辞書を引くと「寝いす (カウチ) でくつろいでポテトチップをかじりながらテレビやビデオを見て過ごすような、自分一人の中に閉じこもって精神的な安らぎを求めるライフスタイル。また、そのような生活を好む人」⁽⁵⁾と定義されている。この言葉に象徴されるように、テレビ・ビデオの登場によって「映画」を不特定多数の人々と楽しむ機会は減少している。「シネ・ウインド」が建設された1980年代後半も、レンタルビデオ店進出が続き、映画館の存続は危ぶまれていた。現在も娯楽は多様化し、「映画館で映画を見る」という価値観は、揺らいだ様に見える。

映画の衰退は一面では悲しむべき状況を作り出した。しかし「映画」に対する認識の多様化は、「映画上映」の幅を広げたと考える。芝居小屋での見世物、覗きカラクリ、ふたつの要素から誕生した映画が、個と群の娯楽に分化するのは、自然なことかもしれない。個人の娯楽としての「映画」と、多くの人と悦び・哀しみを共有する「映画」、ふたつの価値観を両立できる社会からは、より多様なスタイルを持った「映画上映」が生まれてくるだろう。以下の本論では、映画最初期から現在までの上映史をたどることで、人と人との交流を作りだす媒介としての映画に光を当ててみたい。

第1章 「こんぴら館」に見る新潟市最初期の映画館

(1) 最初期・新潟市映画館史

1904(明治37)年、芝居小屋「国粹座」での日露戦争の記録映画上映が、新潟市の映画上映の起源とされる⁽⁶⁾。その後1913(大正2)年に古町8の芝居小屋「改良座」での映画上映をきっかけに⁽⁷⁾、同年新潟県内初の活動写真館「新潟電気館」(古町)が、翌年には「こんぴら館」(金毘羅通り)が相次いで開館している⁽⁸⁾。

このうち金毘羅通りは信濃川に近い船着き場として栄え、芝居小屋や寄席、射的・ビリヤード場、飲食店が立ち並ぶ土地だった。しかし新興の繁華街・古町の登場で客足を奪われていた。古町の「新潟電気館」に対抗して、地元の人々の出資で建設されたのが「こんぴら館」である。同館は木造二階建て・洋館風の建物であり、1階は畳敷き、2階は絨毯敷きで、600人を収容できた(註8に同じ)。映画最初期、新設館は洋風建築であり(芝居小屋から映画館へ変わった館はその建物のまま上映していた)、宣伝方法も入口付近の大絵看板・幟・呼び込みが主流。また、多くの館が下足制を取っていた(註6に同じ)。

「長岡電気館」に生を受けた志水亘さん(第3章参照)は、同館で映画に限らず手品や芸者による舞踊などが上演されていた事を振り返り、「映画に限らず娯楽一般かかってましたから」と語る。映画が新興の娯楽であった時代には、それを盛り上げるために伝統的な舞台芸能やオーケストラ音楽が欠かせなかった。こうした映画以外の娯楽が渾然となった上映は、無声映画のトーキー化や、映画自体の芸術・娯楽性の向上に伴って、

減少してゆく。

「こんぴら館」支配人・小林平八郎氏（故人 1902年生 兄が買収した同館の支配人を1924年から務める）によると、「こんぴら館」と「新潟電気館」は、興行成績を競い、「電気館」がひと月1万円の収益を上げていたのに対し、「こんぴら座」は4千円に留まっていた（註8に同じ）。小林氏は「電気館」を1928年（昭和3年）に買収して傘下に収めたが、同年に「こんぴら館」を火災で焼失する。焼失からひと月後には、古町12の「丸山館」を再び買収、「富士館」と改称し嵐寛寿郎の『駿馬天狗』で利益を上げた。「富士館」の建物は、成人映画館「大要映劇」として営業を続けている（註8に同じ）。

最初期の映画上映にとって重要な存在だったのが、活動弁士・樂士である。弁士の起源は、映画上映前の口上・説明にあった。それが舞台に設けられた演壇で弁士が登場人物の台詞から、状況説明までを口演する形式へ変容した¹⁰。1920年代以降には個性的な弁士が登場し、徳川夢声を筆頭にスター性があった¹¹。また、樂士は無声映画上映中や幕間の演奏を担っていた。弁士はその話芸の優劣が入場者数に影響を与えるほどだったが、樂士は弁士の名調子を邪魔する存在とされ、一般的な評価も上がらなかつた（註10に同じ）。

活動弁士と樂士は、トーキー（発声）映画の登場によって大打撃を受ける。日本における最初のトーキー映画は溝口健二監督の『ふるさと』（1930年 夏川静江主演）だが¹²、俳優の肉声、伴奏音楽がスクリークから流れれるようになるにつれ、弁士・樂士の存在感は薄くなつてゆく。新潟県内でのトーキー映画上映は1931年、「日活電気館」（「新潟電気館」が買収時に改称）における『上海』（大河内傳次郎主演）が最初である。トーキー化によって、弁士・樂士は紙芝居屋や映写技師に転職した。小林氏は「せん別ねはずんでやつたが、華やかな時代を経験してきた人たちだけに（略）暗涙を禁じえませんでした。（中略）あのピアノ弾き、バイオリン弾きたちはその後どういう人生をたどつたのでありますか」と語るに留めている（註8に同じ）。

（2） 映画上映と“渡世人”

かつての映画上映と“ヤクザ・渡世人”とは、密接に結び付いていた。映画館に限らずあらゆる娯楽が集まるのは歓楽街である。そして映画館に人々が集うことで、大きな利益も生じる。映画業界が斜陽を迎える事で「自分たちが観たい映画を自分たちの手で上映する」自主上映運動や、利益よりも多様な作品の上映を志すミニシアターなど“営利目的”に留まらない映画上映が誕生した。しかし映画史を見詰める際には、映画が“興行”であった事への注目が必要だ。

1903（明治36）年、東京・浅草の見世物会場「電気館」にフィルムを提供し、日本初の映画常設館とした「吉沢商店」経営者・河浦謙一¹³は、当時の浅草の歓楽街について以下のように記している。「浅草公園六区の興行物は、初めは入口に入墨をした遊び人風の大きな男があぐらをかゝって、入場券代わりの木の札を受け取ることになって居り、中流以上の人や婦人は気味悪がってあまり見に行かなかつた（中略） 電気館を改築して洋風二階建てにして、切符を売り、案内する人はすべて女子を使うことにしようと思い、その頃六区の興行場の雇人を一手に引き受けっていた顔役の新門辰五郎氏に交渉させたが、子分達が承知せず、俺たちの仕事を邪魔する河浦を殺してしまえと騒いでいるとのことゆえ、私が新門の親分に逢つて、女房でも娘でもよいから、今迄と同じ日当を出すから、六区の発展のため承知してくれと話したところ、わかりのよい人ゆえ、無事に納まり…」（註13に同じ）

新潟県内においても、「シバタ興行」が、かつて下越地域の多くの映画館を経営していた。その一例として、「シバタ興行」系列の「シバタ観光」が運営する映画館に勤務していた長谷川浩一さん（1941年生）を紹介したい。長谷川さんは1964年12月25日に「シバタ観光」がオープンした映画館・ホテル・ボーリング場などが入る「観光会館」に、開館時から1977年まで勤務した。幼い頃から大の映画ファンだった長谷

川さんは、当時電気工事を請け負う会社に勤務していたが、先輩から「シバタ観光」への入社を誘われたという。長谷川さんの父（国鉄職員）は、「シバタ観光」入社を反対したが、結局映画館ビルの電気管理・施設維持の仕事に就くこととなる。

この劇場（5スクリーン）が、1990年まで長岡市内唯一の映画館だった（第6章参照）。志水亘さんの生家「電気館」が「シバタ観光」によって買収された事実（第3章参照）や、「こんぴら館」の経営競争を見ると、「映画上映」が利益を追求する「商売」として捉えられていたことが明確になる。

第2章 「にいがた映画館物語」に見る全盛期映画館史

（1）「にいがた映画館物語」

本章では、新潟市職員でありジャズ評論家としても活躍した野坂恒如氏（故人 1926～1988 作家・野坂昭如の兄）が、新潟市内映画館での思い出を記した「にいがた映画館物語」^⑩を基に、映画全盛期の風貌を紹介したい。恒如氏は1945年秋に父の転勤に伴って新潟へ移住した。恒如氏の祖父は、浅草で活躍した弁士・西村楽天であり、幼い頃の氏は父に連れられ、映画や女剣劇、榎本健一・古川緑波のショーを観て育った。

恒如氏が新潟で初めて映画を観たのは、1946年春「沼垂日劇」で上映された『待って居た男』（1942年 長谷川一夫主演 マキノ正博監督）だった。恒如氏にとって新潟駅へ行く以外は万代橋を渡ることがなく、昔ながらの家並みの中に目指す建物を見付けた時の安堵感を記憶しているという（注14と同じ。私の祖母も新潟の下町〔シモマチ〕・舟入町の生まれだが、万代橋を渡って対岸へ行く機会はなかったという。かつて信濃川を挟んで沼垂地区は新発田藩、新潟島地区は長岡藩の勢力下にあり、両地区的対立を生み出したとされる）。この「沼垂日劇」が「二番館」と呼ばれたように、当時の映画館には「封切館」「二番館」「三番館」という区別があった。「封切館」の「封切」とは新品のフィルムの封を切るという意であり、大手配給会社のロードショー作品や洋画の新作を上映していた。「二番館」「三番館」は、「封切館」で公開されたフィルムが時期遅れで上映される館であり、入場料も割安となる。

（2）1960年代の新潟市映画館史

1957年、新潟県内の映画館数は131館に及び、新潟市内でも23館を数えている^⑪。1955年からの福井県勤務を終え、恒如氏が新潟に戻った1962年には、後述する「グランド劇場」や名画座「ライフ」（古町7）も開館している（注14と同じ）。この内「ライフ」は新潟市内外の映画ファンに語り継がれている館である。同館は1960（昭和35）年10月26日、山形県鶴岡市の商事会社「たつみ商事」によってニュース映画専門館として開館した^⑫。そして東京オリンピックを控えテレビが普及しつつあった1962年、「名画座」としての営業を開始した（注16と同じ）。名画座とは、映画史に残る名作や数ヶ月遅れの新作映画を低料金で上映する館を指し、ミニシアターに通じる性質であった。

1962年、ATG（日本アートシアター・ギルド）が設立された。同社は、芸術・実験性の高い国内外の作品を配給したり、篠田正浩や大島渚・岡本喜八等による異色作（大手映画会社が製作を渋るような）への出資を行なった^⑬。「ライフ」も1962年からATG加盟館として、同社の配給作品を上映する一方、『ローマの休日』『ロミオとジュリエット』といった名作、新潟での公開が困難な単館系作品（『旅芸人の記録』『木靴の樹』など）、成人映画などの上映を実施した^⑭。また、毎月「ライフレポート」というB5版三つ折の上映プログラムを作成していた事でも知られる（「ライフ」について第5章で詳述する）。

(3) 「成人映画館」の登場

テレビ普及によって映画人口が減少する過程で、1960年代後半には洋画封切館だった「花月劇場」や「大要映劇」「沼垂みなど座」などが成人映画館として営業を開始している。ポルノ映画を愛していた恒如氏は、1970年前後の成人映画館の情景を以下のように記している。

「館内はいつも満員でほろ酔い状態の人もいて、スクリーンに向かってやじや奇声など、ちょうどストリップ小屋のあの感じで楽しんでいた」

「当時私がよく出掛けたピンク映画館は（中略）夕方六時ころから朝七時まで上映。ここに集まる人はサラリーマンらで終電車に乗り遅れた人たちや仕事帰りのホステス、バーテン関係等々常連の顔がみられた。大抵、酒やツマミを持ち込んで、映像のヌードをサカナに談笑。その雰囲気が楽しくて深夜この連中に会うために、わざわざ週二回くらい出掛けたが、ここでの交流は全く楽しかった。」（注14に同じ）こうした成人映画館に流れていた空気は、映画全盛期の観客同士による交流を忍ばせる（第3章参照）が、1970年代以降、新潟市内の映画館は閉館が相次ぐ。

第3章 聞き書きに見る新潟市の映画館史

以下は2006年8月30日、『映画館史』編集部主宰で開催された「映画全盛期」を生きた方たちの座談会（『月刊ウインド』2006年11月号参照）及び、『映画館史』スタッフとして伺ったお話を（月岡哲郎さん及び飯塚美和さんの項）に基づく。

(1) 月岡哲郎さん（1941年生）

月岡さんは、父が経営していた旧豊栄市・葛塚の「葛塚劇場」（後に豊栄映画劇場と改称）で生を受ける。兄・月岡貞夫さんは、映画監督・宮崎駿と同期のアニメーター。月岡さんは新宿歌舞伎町の映画看板製作会社で修行を積み、デザイン関係の仕事及び新潟市景観アドバイザーとして活動してきた。

映画館に生まれた月岡さんにとって、「映画」と幼い頃の記憶とは密接に結び付いている。当時の映画館では、2本立て・3本立て上映が主流であった。「豊栄映画劇場」では幕間の休憩が終わり、客席が埋まるとコマーシャルのスライド上映を行なっていた。主なスポンサーはバー・キャバレーであり、バックミュージックとしてジャズ、ラテン音楽が好まれた。スライドは5秒ほど映し出されると、「ガチャ」と音がして、次の写真へと切り替えられる。子供の頃の月岡さんは、スライド上映の際に蓄音機係としてレコードをかけていたそうで、このレコードを円盤にして遊び、父から叱られたそうだ。また中学生の頃、先生に引率されて自宅へ『二十四の瞳』（1954年 木下恵介監督）を観に行ったが、父に「手伝え！」と怒鳴られ、映写室から鑑賞したこともある。同級生から抜けて映写室から映画を観ることで、何ともいえない良い気持ちを味わったそうだ。

月岡さんはひとつの映画館がなくなることは、そこに付随する記憶や生活までが消滅することだと語る。これまでの調査でも、映画館と日常が結び付いていた時代に関する証言にあった。新潟市沼垂に長年暮らす佐藤勲さん（1939年生）は、次のように語っている。「私の家の前は小さな橋だったんですね。映画館が跳ねてあがると、あの時分下駄ですからカラシコロンカラシコロン音がする訳ですよ。そうすると『あ、映画が終わった時間だな』って」。また、「シネ・ウインド」支配人であり、名画座「ライフ」で映写技師を務めていた橋本巖さん（1953年生）は、古町のラーメン店「三吉屋」が西堀端に屋台を付け、終映後ラーメンを食べて家路につく観客の姿を記憶している。1950～60年代の映画館は、「映画看板」に使う絵具を溶か

すニカワ」のように、人と人を繋ぐ媒介だったという月岡さんの言葉が、印象に残っている。

(2) 遠藤昭伍さん（1930年生）

遠藤さんは新潟市古町の生まれ。1952年、洋画封切館「花月劇場」（西厩島町 1939年12月開館 旧「こんぴら劇場」）に入社。その後「新潟東宝劇場」（古町4 1957年から新潟日活と改称）を経て、山形の「協映興行」へ東宝系列館支配人として赴任した経歴を持つ。

戦後すぐから60年代にかけて、映画館の観客動員は非常に多かった。遠藤さんが最も多くの人が劇場に訪れた例として語るのは、ディズニーの記録映画『砂漠は生きている』である。1日8回の上映に人々が押し寄せ（日中は教師に引率された学生たち、夕方以降は大人たち）、劇場の枠目にぴったりお客様を入れての上映はこの時だけだったという。また上映時に満員になることが多かったため、子供たちも席を取るのが上手な子と下手な子とにわかれていったそうだ。

観客が多いため、劇場は回転率を上げる事で大きな利益を求める。遠藤さんも次の回の観客が詰め掛けていると、支配人から「上映回数を1回増やしてくれ」と言われ、フィルム1巻（約10～20分）を抜いて早く上映が終わるようにしていたという。また「新潟日活」に1976年から10年間勤務していた長谷川潔さんによると、映写機にはフィルムが回る速度をコマ単位で調節できる装置があり、1時間の映画を20分早く終わらせることもできた。

また新潟でオールナイト上映を初めて実施したのは「新潟日活」だったという。夜も人通りの多い古町にあった同館が、この人たちに狙いを定めて1958年からオールナイトを実施したところ、大きな集客を得ることができた。『新潟県年鑑』を見ると、オールナイト上映が隆盛を極めたのは1962年頃であり、「新潟大映」では土曜夜から日曜朝かけて上映し、「昼（平均四百人）より、オールナイトの入りが多く倍もあるんです」と述べる程の集客があった^⑯。

野坂恒如氏は、全盛期の映画館を振り返り「当時は全く見知らぬ人たちが、休憩時間にお互いに今の映画のことを話し掛けたりしてのおしゃべりが気軽にできたり、また各人が持ってきた、駄菓子や握り飯等を食べたりした」（注14に同じ）と記している。遠藤さんも以下のように語る。「私なんか一番思うのは、昔は常に映画館は満員だった。満員で観ると、同じ悦びも周りと一緒にあって大きく膨らんでゆく。哀しい時も泣き声まで聞こえてきてね。今、2、3人で映画館で映画観ても正直寂しい。自分の反応だけで。映画っていうのはある程度人数が集まって観てはじめて、色んな感情を共有したことになるなって気がしますね。」

(3) 渡辺道雄さん（1934年生）

渡辺さんは大学卒業後、新潟日報社に入社したが、その2年後、当時の小林百貨店内「小林映画劇場」（現新潟三越 かつては恵谷小路に建物があった）へ転職。同劇場及び、キャパシティ1500人の「グランド劇場」（1981年3月20日閉館）^⑰ 2館に30年間勤務した。

渡辺さんは「小林映画劇場」で新潟大火（1955年10月1日 注31）を経験した。当時のフィルムは高価で、渡辺さんはフィルム2本を担いで映写室から逃げだした。火が収まつてから劇場に戻ると、経営者から開口一番「フィルムはどうだった？」と聞かれたことが印象に残っている。同劇場は焼失から1年後、西堀通5で再建されている。渡辺さんはこの劇場に加え、1957年2月9日オープンの洋画専門館「グランド劇場」の2館で営業として勤務している（注20に同じ）。

1959年、『グランド劇場』は年間の入場者が38万人を超える、1日の入場者も平均1050人に及んでいる（注20に同じ）。1950年代は他館でも入場者が多かった。佐藤勲さんは1953年に大ヒットした『君の名は』が「新潟松竹館」（古町5）で上映された折、行列だけを見物に出かけたという。また、大勢の

人が集う劇場内では痴漢行為も頻発し、とくに劇場後列では被害が多かった。

(4) 志水 亘さん、飯塚美和さん（1931年生）

志水さんの生家は、長岡市で戦前に開館した「電気館」である。志水さんは同館の造りが芝居小屋風だったことを記憶している。スクリーン前にはステージがあり、さらにその前にはオーケストラボックスがあつて、無声映画がかかつっていた頃の名残で、館内に弁士とオーケストラ用の楽屋も残されていた。同館では映画に限らず、手品や芸者踊りなどが上演され、「名乗ってるのは映画館だけど娯楽一般かかつてましたから」と志水さんは語る。

多くの人に「映画館」が「映画だけを上映する場所」では無かつた頃の記憶が残っている。坂口安吾の姪・飯塚美和さんによると、大正9年開館の「新潟劇場」（東堀9 1949年、「宝塚劇場」と改称）で、初興行を記念して名優・六代目尾上菊五郎の公演が行なわれたという。「新潟劇場」はかつて芝居小屋「本郷座」だったが、舞台が狭く客席にも冷めた空気が漂い、飯塚さんの父が「菊五郎に悪い」と語ったそうだ。また同館が浅敷席で、オーケストラピットが残っていた記憶もあるという。先述した月岡哲郎さんは、映画館が芝居小屋から発展してきた名残は、劇場の綾帳やスクリーン手前の舞台にあると語っている。シネマコンプレックスの劇場を思い浮かべて欲しい。多くの場合、スクリーンには舞台が付いておらず、映画が始まる際には場内が暗くなるだけで綾帳も上がらない。

(5) 住吉俊作さん（1928年生）

住吉さんは新潟市西堀で旅館業を営む家に生まれた。幼い頃から両親に連れられ映画館を廻った。戦前、14才以下は観ることのできない映画があったが、観たい一心で高足駄とマントでごまかした記憶もあるという（1917年、警視庁が施行した「活動写真興行取締規則」には「映画作品を事前検閲によって甲種〔15歳以上向き映画〕と乙種〔15歳未満向き映画〕とに区分し、映画館において年齢別入場制限を実施する」とあった。1920年撤廃。）⁴⁰。1951年、住吉さんは「宝塚劇場」（旧富士館）に入社するが、「『映画が好き』と『映画館の仕事』（が好きと）は全く違います」と語る。劇場の先輩から「お前さん、何のために映画館に勤めた。映画が観たいから勤めたんだろ？」と訊かれ、「観たいことは観たいんですけど、映画館の仕事もしたい。半々です」と答えると「どっちかにしろ」と言われた記憶が残っているそうだ。

住吉さんや遠藤さんが従事していた頃の映画館の空調・冷暖房設備は、杜撰なものだった。観客が詰め掛けても天井に扇風機があるくらい。暖房としては戦前の「本郷座」のこたつ（行火代が必要）や、「花月劇場」の温水式の床下暖房について、座談会出席者は語っている。住吉さんも1954年の『七人の侍』上映時には、3本を続けて上映した為に失神した観客がいたという。その観客から「あんまり腹が減ったから、家帰つて食べていいですか？」と訊ねられた記憶もあるそうだ。住吉さんは、この上映を最後に「いい仕事をした。もうやめてお客さんに戻ろう」と決意し「宝塚劇場」を退職している。

第4章 映画衰退期と自主上映運動

1958年、日本の映画人口は11億2745万人に達し⁴¹、「映画黄金期」と呼ぶにふさわしい繁栄を見せた。しかし同年をピークに映画人口は減少を始め、映画界は斜陽期へと向かう。1960年、史上最高の7457館を数えた映画館数は、1971年には2974館まで激減した。1960年に10億1436万人を数えた映画人口も、1964年には5億1121万人と約半減し、1972年以降は現在まで1億人台が続

いている（注22に同じ）。

映画人口が減少を始めた1960年代半ば頃から、性描写を中心としたいわゆる「ピンク映画」が登場した。1971年8月に経営不振から映画制作を中止した映画会社「日活」では、低予算の成人映画（日活ロマンポルノ）を発表している^④。全国の2番館や名画座でも今まで通りの上映を断念し、成人映画館として営業を続けるか、廃業するか選択を迫られるケースが多かった^⑤。

新潟市内でも1963年からの13年間に、「花月劇場」「小林映画劇場」「新潟大映」など古町地区の劇場に加え、沼垂・山ノ下の劇場も次々と姿を消している（注14に同じ）。新潟市山ノ下の「北都映劇」「山ノ下劇場」（中村直吉氏経営）を例に見てみよう。同館は映画全盛期には盛況を誇り、日曜には1500人以上の観客が詰めかけた。しかし1960年代半ばから客足が激減し、閉館時の1976年には1日の入場者が20～30人に留まつた^⑥。直吉氏の孫にあたる直弘氏は「映画ファンが封切館にさらわれて客足が落ちたことが最大ですが、ここへ来て子供番組まで一流館に持っていたことが大きいです」と閉館の要因を語っている（注25に同じ）。現在まで、資本をバックに配給・広報を行なう映画作品・映画館に客足が向き、小規模経営館が影響を受ける状況は続いている。

新潟市古町の「グランド劇場」（1981年3月19日閉館）では、1959年に年間入場者数38万3574人を記録し、映画衰退期でも年間20～10万人ペースの入場を維持している。しかし1979年1月には1万5千人の入場者数を記録しているのに対し、同年5～6月は月4000人程度の入場者に留まっている（注20に同じ）。こうした入場者数のバラつきには、「映画が上映されているから映画館へ行く」のではなく「話題になっている映画が上映されているから、映画館へ行く」という観客心理が反映しているのではないか。実際「グランド劇場」での『エクソシスト』上映時（1974年）には1日の最高入場者数が2839人、1975年の『ジョーズ』上映時も3580人という記録を残している（注20に同じ）。元「新潟日活」長谷川潔さんは「昔はクーラーなんかないから、暑い時は涼みがてらパチンコ屋か映画館に出かけた」と語っているが、テレビの普及やライフスタイルの変化は、「映画館へ映画を観に行く」という行動を、生活に直結した存在から遠ざけたと言える。話題作・大作のみに客足が向き、恒常的な集客を望めなくなれば、大手映画館は意欲的な上映を渋るだろう。名画座や2番館・3番館の閉館が相次ぐ中で、「映画上映」のスタイルがしなやかに分化し、根付く事が必要となってゆく。

（2）「自主上映運動」への脚光

こうした分化には、ATGによる非商業的作品の配給や製作、「岩波ホール」^⑦など意欲的な作品の上映を志す「ミニシアター」がある。そして70年代に存在が際立つのが、「自分たちが観たい映画を、自分たちで上映」する「自主上映運動」だ。1974年版『新潟県年鑑』には「（1973年）4月以来映画好きの若い人たちの手で、劇映画の自主上映が連続して開かれている。洋画系名画座が新潟市に一館あるだけで、名画を見たいという最近の若い人たちの欲望に答えられないのが実情だ。そこで常設映画館ではめったに上映されない作品をプログラムに組んでいるものだ」^⑧とある。

1986年までに100回の上映会を達成した^⑨「シネマディクトクラブ」（1976年9月発足）を始め、1983年、新潟県内の自主上映団体は新潟・上越・三条などに主なもので7つあった^⑩。この内「上越映画鑑賞会」は2006年で30周年を迎えており^⑪。この他にも「新大映画俱楽部」「新大シネマテーク」など学生組織や、1979年全ての映画館が閉館（休館を含む）した佐渡^⑫の「相川町よい映画を見る会」などが70～80年代には活動していた（注29に同じ）。「自主上映運動」には、上映作品選定、配給会社・上映会場との交渉など多くの労力と経費が必要となり、20～30代の映画ファンが主力を担った（注29に同じ）。

しかし「自主上映運動」の継続はきびしかった。1982年10月、「シネマディクトクラブ」では、ルキノ・ビスコンティの『若者のすべて』上映会を企画した。当時、同作品のノーカット版が東京で公開され、「シネマディクトクラブ」でも初公開時のフィルムによる上映を目指していた。準備が完了した頃、メンバー・加藤良夫さん（1955年生 現新潟映画研究会会員）は、ある新潟市内の劇場から呼び出され、『若者のすべて』ノーカット版の版権を取得している配給会社からの警告状を見せられた。そこには「①日本における上映権は当社にあり上映は許可なくして認められない ②上映を強行すればあらゆる法律手段に訴える」といった文面が記されていた。結果、上映会は中止に追い込まれる（注12に同じ）。また新潟・上越・三条などには自主上映団体があったが、市内の映画館を「シバタ観光」「シバタ興行」が独占的に経営していた長岡市・新発田市では、自主上映が行なわれなかった。1970～80年代には「映画」＝「興行・商業」という価値観が常識的であり、観客が「上映側」に移ることがいかにも困難だったか、これ等の事例は証明しているだろう。

さらに団体存続の障壁となったのは「資金」の問題である。「自主上映運動」が営利目的ではないとはいえ、運営維持のために集客を確保する必要があるし、地方での上映が難しい作品を人々に楽しんでもらう事こそ「自主上映」の大きな意義である。多くの上映団体は定期上映で赤字を抱え、会員からの徴収で損失を補填していた。

（3） 映画ファン、映画サークルの存在

映画全盛期を生きた人々の「映画」への愛着は大変強かった。「シネ・ウインド」による「新潟県映画館史」編集部では、県内全域の映画館情報の収集を目標に、アンケートや資料提供を広く呼びかけた。パンフレットやチケット・雑誌の切り抜きなどのスクラップ帳、映画館名を手書きの新潟市内地図に書き込んだもの、アンケートに綴られた映画館の思い出…。『映画館史』副編集長・中沢敬子さん（1946年生）も、高校生の頃、雑誌の映画評やスターの写真や、感想をまとめたノートを作っていた。「映画」の愛し方は、多様だ。「観客」として「映画」を堪能する人。「映画」を上映したいと願う人。こうした人々の交流が、「自主上映」を支える原動力となるのではないか。

「自主上映運動」の発芽として「映画サークル」にも注目したい。新潟市内では1950～60年代、映画作品の合評を行なうサークルが、有志や各職場で運営されていた。映画評論家・佐藤忠男氏を輩出した「新潟映画研究会」（1935年頃発足）⁶⁰代表・福島市男さん（1935年生）は、「映画研究会」や「新潟日報社」内サークルに加え2～3のグループを掛け持ちし、「ライフ」発行の『ライフレポート』への寄稿及び編集に取り組んでいたそうだ。映画サークルの連合体「映画サークル評議会」の会報誌『カチンコ』を見ると、1本の映画を巡って異論・反論が交わされ、いかにも「映画サークル」に熱気がこもっていたかが伝わってくる。

「映画」を自我とする人々にとって、自由に映画が観られない状況は大きな損失となる。加藤良夫さんは、「レンタルビデオも無く、観たい映画を観れない状況だったから自主上映は生まれた」と語っている。「映画」の斜陽を放つてはいけない人々がいるからこそ、市民による「映画上映」は存続している。もし、自分と強く繋がった娯楽を楽しめなくなったら、どうするだろう。「自主上映運動」に取り組んだ人々、「観客」として映画館に足を運んだ人々は、自分の力で娯楽を実現した存在と言えるだろう。

第5章 シネ・ウインドと1980～90年代の映画館状況

（1） 1980年代初頭映画館史と、「ライフ」閉館

1980年代に入ってからも、新潟市内では多くの映画館が閉館している。1981年3月19日には、洋画封切館「グランド劇場」が、1985年3月1日には名画座「ライフ」が閉館となつた。背景となつていた

のは、「大作映画」以外の不振である。例として『山猫』ノーカット版の新潟公開がある。1981年12月に東京「岩波ホール」で公開された同作品（注26に同じ）は大ヒットを收め、仙台でも5千人の動員を記録していた（注29に同じ）。新潟では1982年2月に「スカラ座」が上映を行なったが「最初の一週間の観客が七百人弱。売り上げはわずか七十万円。百万円を切ったのはちょっと記憶に…」という結果だった。「ライフ」でもキネマ旬報ベスト1を獲得した日本映画特集を実施したが、中田享支配人によると「平日は二、三十の客が入ればいいほう。ふだんの五分の一」だったという（注29に同じ）。映画評論家・松浦謙二氏（故人）は、「かつては新潟も名作映画の動員で仙台と肩を並べていたのですが、新大の（市内五十嵐への）移転、グランド劇場の閉館以来名画ファンの地盤沈下は目を覆うばかり」（注29に同じ）と語っている。

そして「ライフ」閉館は、映画ファンへ衝撃を与えた。学生など若い客層が多く、往年の名画や支配人選定による特集上映など、個性的な運営を行なっていた同劇場は、多くの人が思い出を語っている。福島市男さん・中沢敬子さんを始め、映画全盛期を過ごした人々から「ライフ」の思い出を聴くことは多い。そして1970年代以降に映画ファンとなった人達もまた、「ライフ」を語る口調は熱い。「シネ・ウインド」開館以前からの中心メンバー・市川栄さん（1958年生）は、「初めてライフに行ったのは中学1年の時です。（略）最初はぼつぼつ、中一の冬くらいからは月に2、3回、バス代が映画代と同じくらいでもったいないので、自転車で通いました」³⁰と振り返る。『映画館史』編集長であり、新潟大学在学時から「シネ・ウインド」で活動している田村聰昭さん（1966年生）も、「ライフに最初に行ったのは高校生の時だと思います。意識してライフに行き始めたのは大学に入って（略）から。『ブリキの太鼓』や『旅芸人の記録』で映画にはまり始めたのですが、翌年3月に映画『お葬式』で閉館してしまったという…。」（注33に同じ）と語る。

幅広く人気を集めた「ライフ」だが、1985年には「封切館が徹底動員し尽くすので、ファンが二番館上映まで待ってくれない。それに何よりフィルムの映写権料が高くなつて、（100席程度の）小さな館ではなかなか商売にならなくなつた」（富樫健治支配人）といった状況で、新潟大学の移転も追い討ちをかけた（注17に同じ）。「ライフ」閉館について、「新潟日報」紙に映画時評を連載していた荻昌弘氏（映画評論家 1925～1988）は「『ライフ』の閉館が悲しい。さびしい。悔しい。（略）『ライフ』のような映画館さえ継続できない日本で、今後、都会人は映画という人間の文化を日常どういう形で受けとめるのか。（略）新潟市民の損失は、はかり知れない」³¹と記している。この記事を読んだ（株）第一印刷所社員・齋藤正行（1949年生 現シネ・ウインド代表）は、「市民映画館建設」を提唱する。

（2）「シネ・ウインド」の誕生

齋藤は ①一口1万円の出資を市民から募って映画館を作る ②映画に限らず演劇・音楽・落語・美術など、あらゆる芸術を上演する劇場を作る ③あらゆる思想や権威から距離を置くために、劇場を会員の年会費と劇場収入のみで運営する ④上映作品選定など劇場の運営の中心を会員が行なう といった方針を掲げ、同年5月に「市民映画館建設準備会」を発足させた。同会のメンバーには、映画や演劇・音楽・落語・文学を愛し活動を行なってきた人たちを迎えて、さらに「新潟映画研究会」や各自主上映団体、新潟で映画文化を支えてきた先人たち（ジャズ評論家・野坂恒如氏〔故人〕、映画界や、新潟で文化に取り組む人々への幅広い人脈を持つ映写技師・江村隆芳さん〔1940～2007 故人〕、戦前から新潟県内で映写技師として活躍した鈴木四平氏〔故人〕）に助力を仰いだ。1985年、7、8月には活動弁士・松田春翠氏（故人）を招いての無声映画上映、映画監督・小栗康平を招いての上映会を開催。同年10月には、（株）新潟交通が信濃川沿いに開発した商業地「万代シティ」第2駐車場ビルへのテナント入りが決定、11月7日に建設会スタッフの編集で月刊誌『月刊ウインド』³²創刊号を発刊し、12月7日に「新潟・市民映画館シネ・ウインド」は閉館にこぎつけた。「新潟・市民映画館」は（有）新潟・市民映画館が管理する常設館を、会員組織である「新潟・市民

映画館鑑賞会」が所有する形で運営される。親族経営が多い有限会社を、新潟市内外の市民（齋藤は「名も無い市民」と称する）が經營するスタイルや、有力資本が經營にかかわっていない点が特徴だ。

「シネ・ウインド」（以下ウインド）は「ミニシアター」と呼ばれる、大手館が渋る国内外の意欲作・問題作、往年の名画を上映する小規模館である。「ウインド」も「完全入れ替え制」^④や各館独自の作品選定など多くの「ミニシアター」と通じる性格を持っている。しかし「ウインド」最大の特徴は、営利目的の映画館でありながら、様々な文化活動に取り組む人々が無償スタッフとして集う“都市の拠点”としての性質である。学生時代から坂口安吾に傾倒し、学園闘争に背を向けていた齋藤代表は、団結や規則・イデオロギーによって人が縛られる事を嫌う。「ウインド」に集う人々も年齢や職業・価値観が多様で、協力し合いながらも群れる事が少ない。上映作品の選定を行なう人、雑誌・単行本の編集に関わる人、演劇・文学・美術などイベント運営に取り組む人、様々な目的を持った人々が自分の意思で出入りをしている。彼ら無償スタッフに大きな権限と運営責任を与え、最終責任を齋藤代表が負うスタイルで「ウインド」は活動を続けている。

「ウインド」独特の活動の源は、「市民映画館建設運動」時に「映画ファン」に限らず、多彩な文化活動に取り組む人々をスタッフに迎えた点にあると私は考える。特定の嗜好や年代・思想に偏らず、「何かをしたい」と願う市民を仲間とし、知識を吸収し合いつつも独立して活動に取り組む。「サロン」的な様相が「ウインド」には強い。作家・中上健次氏（1946～1992）は、齋藤代表が立ち上げた「安吾の会」^⑤の発会時に来県し、その死まで「ウインド」と親交を深めた。中上氏は「ウインド」に集う人々のネットワークを「アメーバのように細胞分裂し、それぞれが核を持って活動している」^⑥と評している。90年代以降、「ウインド」から生まれた人脈は、多彩に分裂してゆく事になる。

（3）「シネ・ウインド」の力、そして問題

「映画館」としての「ウインド」を見る時に注目されるのは、映画上映の先人や「映画史」を尊重しつつ、形骸化してしまった常識と真逆の手法をとる点である。1970年代に登場した「自主上映運動」は、「映画を上映する側」と「映画を観る側」という壁を越える手段を作り出した。それを発展させる形で「ウインド」は自館を会員組織である「新潟・市民映画館鑑賞会」が所有する常設劇場と定義する事で、「素人」である会員が映画館運営に“本人が希望すれば”いつでもタッチできる手法を生み出した。

専従以外のスタッフは一切無償であり、館側からの指示ではなく「自分で考えて」仕事をする事が求められる。多くのスタッフが10年以上運営に参加し、開館以前からのスタッフも数多い要因は、「強制」ではなく自分の「意思」で、映画館の運営に取り組める充実感にあるのかもしれない。また、若いスタッフが年長者に意見を仰ぎ、協力して作業を行なう事は、年代を越えた知識の交換にもつながる。イベントに限らず日常的な運営に、新しいスタッフが加わり常連スタッフと刺激を与え合うスタイルが「ウインド」の強みである。

一方で問題となるのは、こうした「ウインド」の活動がどれほど市民に浸透しているか、という点だ。「ウインド」は85年5月の「建設準備会」設立から8ヶ月で開館に至った。1985年11月「建設準備会」主催による「三人講演会」に出演した推理作家・小林久三氏（1935～2006）は、「私が危ぐの念をもつのは、『シネ・ウインド』を支えるファンの層が厚みをまし、底がひろがらないうちに、単なる運動の勢いだけで開館の運びになってしまったのではないかということである」「ひょうたんからコマが出たといった形で実現したのが『シネ・ウインド』だといえるだろう。（略）会員たちも、あまりにもあっけなく運動が実をむすび、開館にまでこぎつけてしまったことに、内心では驚き、戸惑い、不安を感じているのではないか」^⑦と記している。小林氏が指摘するように、「ウインド」は市民活動や映画上映に関心を抱いている人々からの、強い信頼を得た。しかし、それがより幅広い層の市民にまで及んだとは言えないだろう。

小林氏も評価する「中心メンバーの、大胆で、向こうみずな冒険心」（注39に同じ）は、「ウインド」の

美点ではあるが、その魅力を市民へ伝える「器用さ」を獲得しているとはいえない。齋藤代表は「俺は客を客とも思わない。ここに来る人は仲間として応対する」「例え親子でも女房でも、人間の間には壊せない壁がある」とオーバーな表現で口にするが、そうした独特の価値観に抵抗を覚える人も多い（第7章参照）。終章で詳述するが、シネコンの登場によって「映画」への観客の認識は変わり、「観たい映画があるから映画館へ行く」ではなく「映画が上映されているから映画館へ行く」という人々が増えたと私は考える。こうした意識の変化によって「ウインド」を訪れる観客が、以前ほど“内側”に踏み込まない状況も生まれている。

「ウインド」の上映スタイルは“革新的”に映るが、1980年代までの映画上映史をふまえた手法だと定義する事もできる。映画館で、演劇や音楽会・落語独演会など「映画」以外の演目を上演するスタイルも、映画上映が芝居小屋で始まり、オーケストラによる伴奏や実演芝居が演じられていた事につながる。また、「映画」を巡って異なる価値観・世代の人々が意見を交し合い、映画上映に取り組む姿は、全盛期の映画館における観客同士の会話（注14に同じ）や、「映画サークル」「映画自主上映」につながる性質を持っているかのようだ。

第6章 日本映画上映運動と1990年代の映画館状況

（1）1990年代初頭・映画館史

「シネ・ウインド」について一般ロードショーラー館は「ウチとはそれほど競合しないから」^⑩と共に存していた。また元「新潟日活」長谷川潔さん、映写技師・江村隆芳さん、「ウインド」支配人・橋本巖さん（元「ライフ」映写技師）が中心となって、市内映画館ひと月分のスケジュールを掲載した冊子「たむたむ」（1985年1月頃から3年間）を発行する等、共同作業も生まれていた。しかし「レンタルビデオ」店進出は、映画館の存続のさまたげとなっていく。

1989年1月23日には古町4の「新潟日活」が閉館している^⑪。同館は「昭和館」として1928（昭和3）年頃、開館している。戦後は「新潟日活」と改称して、石原裕次郎・小林旭主演作などで人気を博した。1971年、「日活ロマンポルノ」製作が始めると、同館も成人映画館として営業し、1988年までに約1100本のポルノ映画を公開している。しかしビデオ普及やアダルトビデオの登場によって路線変更を余儀なくされ、「文芸物映画」上映に取り組んだが「これも時代のすう勢でしょう。自宅のビデオで裸が見れる時代ですから。（略）閉館もやむを得ません」という結果となる（注41に同じ）。また、1990年2月18日には長岡市でも「シバタ観光」の映画館5館が入居する観光ビルが閉館し、同市内からすべての映画館が無くなっている^⑫。これを契機として、市民運営による映画館建設を目指す「長岡・市民映画館をつくる会」が発足した。

（2）中村賢作さんの「日本映画上映」活動

新潟市内の市民による「映画上映」には新たな動きが生まれている。会社員・中村賢作さん（1962年生）による「日本映画上映」もそのひとつである。「日本映画」の不振が叫ばれた1990年代に、中村さんは「ウインド」内で日本映画上映を集中的に行なう「日本映画大冒険」というチームを立ち上げ（1992年4月）、オールナイトなどで1997年4月までに100作品を上映した^⑬。1996年からは団体を「HOGA-BIN」と改め、全盛期に活躍した監督たちの体系的な上映、新進の映画監督・俳優の特集を開催し、2000年までに100企画のイベントを実現している^⑭。また中村さんは、上映時に俳優・大杉漣、田口トモロヲ、寺島進、映画監督・工藤栄一、廣木隆一、阪本順治等、映画人を招聘してのイベントを開催^⑮し、「ウインド」

と日本映画の前線で活躍する人々とのパイプ役を担っている。

1990年代、多くの館では洋画のオールナイト上映が大きな集客を得ていたが、「ウインド」では洋画オールナイトを禁止し、利益を上げることの難しい邦画オールナイトに重点を置いた。中村さんは「人によつては、『日本映画はアニメとヤクザ映画ばかりだ』と言う人もいるし、『テレビドラマと同じ人しか出でない』と言う人もいる。それに対し（略）少數の例証で反論したところで、『そんな映画知らない』で返されるのがオチだ。結局、日本映画は、その多彩な顔を探索することに怠惰になっている我々に対し、甚だシャイに顔を俯かせるばかりだ。（略）新しい日本映画の芽の萌出る瞬間を目撃するために、更にそれを育んでいける環境作りに、力を注いでゆければと思う。」⁴⁴と記し、大作ばかりに注目が集まる状況で、意欲的な映画制作を応援したいという思いを訴えている。

中村さんの上映会からは、「観客」と「上映者」との交流が生まれている。中村さんが編集する「手作りプログラム」や、上映会初期の観客へのお茶とガムのサービス（注44に同じ）は、全盛期の劇場での各館作成のパンフレットや、飲食が付き物だった上映を偲ばせる。また2006年11月25日のオールナイト⁴⁵では、脚本家・荒井晴彦氏の発案で日本酒が觀客に振舞わされ、ゲスト達も酒を口にしながらのトークショーが繰り広げられた。

中村さんの取り組みについて、映画評論家・塩田時敏氏は「他の映画館が上映しないから自分達でやるしかない」という、そういう現実が結果として一番エネルギーになっているのは間違いないと思うな」と評している（注44に同じ）。首都圏・大都市と比較して、多様な作品を観る事が困難な地方都市では、「充たされない」状況が原動力となって「自主上映」が盛んになるのではないか。中村さんの取り組みは日本映画を支える存在として高く評価出来るだろう。2000年以降「HOGA-BIN」は「PROJECT DOMO」と改称し、日本映画上映や、スタッフや学生によるオールナイト上映の運営協力を担当している。

（3）「にいがた国際映画祭」の誕生

新潟市内では1991年2月14日にアジア・中東の映画作品を中心とした「にいがた国際映画祭」がスタートしている⁴⁶。当初は「シネ・ウンド」の中心メンバー及び（財）新潟市国際交流協会（1990年設立）によって運営がなされた⁴⁷。日本海に面し「大陸への玄関口」と称される新潟市だが、アジアやロシア（ソビエト）映画が上映される機会は限られていた。1967年版の『新潟県年鑑』には「ソ連と一番近いということで39年（1964年）10月29、30の両日『第2回ソビエト映画祭』が新潟市松竹大竹座で開かれた。（略）地方都市で国際映画祭が開かれたのは新潟市だけなので注目された⁴⁸」とある。この他にも1959年には『戦艦ポチョムキン』（セルゲイ・エイゼンシュタイン監督）が自主上映され⁴⁹、県下3ヶ所で1万人を動員している⁵⁰。しかし、『ポチョムキン』上映スタッフ間にも、「映画ファン」としてこの名作を観たい人、映画自体には興味が無く政治的な関心を持つ人という意見差が存在した（注52に同じ）。イデオロギーに関係なく市民が歓米以外の国々の映画を「気軽に楽しめる」状況には至らなかつたのではないだろうか。

「国際映画祭」の前身である「アジア映画祭」（1988年）開催時にも觀客から「何で“三人”の映画を上映する。こんな映画を誰が観るんだ」という声が寄せられるなど、「にいがた国際映画祭」は当初から理解を得たわけではない。2006年現在では国際交流協会・（財）新潟市文化振興財団が主催し、市民による実行委員会が運営を行なっている（注50に同じ）。新潟市は国際交流協会の組織改編を検討しており、また北朝鮮を取材したイギリス人監督によるドキュメンタリー映画「ヒョンソンの放課後」上映（2007年・第17回上映作品）が問題視されるなど、存続には困難も多い。

第7章 映画『白痴』とその広がり

(1) 映画『白痴』製作

新潟市「映画上映史」を見るうえで、欠かせないプロジェクトがある。手塚眞監督（1963年生）による映画『白痴』の撮影である。手塚さんは漫画家・手塚治虫（1928～1989）⁶⁰の長男であり、現在も“ビジュアリスト”として映画に限らずイベント・映像プロデュース等で活躍している。

小説『白痴』（昭和21年発表）は坂口安吾（新潟市出身）の代表作であり、終戦による“常識”的崩壊を人間性回復のきっかけと捉えた斬新さで、評論『堕落論』と共に大きな脚光を浴びた⁶¹。1988年、手塚さんは『白痴』の映画化を志した。しかし文芸作であり5億円の制作費を予定する製作は、困難を極めた⁶²。この間手塚さんは、安吾の遺族である坂口三千代さん（故人）・坂口綱男さん（写真家）と面会し、親交を深めている。また1993年には「ウインド」を訪れ、齋藤正行を始め「ウインド」「安吾の会」メンバーとの交流がスタートした。齋藤は「制作費の半分を新潟で集める」という計画を掲げ、「安吾の会」が中心となって、手塚さんによる講演・上映会、新潟県・新潟市・新津市への協力要請を行なっている⁶³。

1994年、県人口200万人を突破した群馬県では、小栗康平監督による劇映画『眠る男』への出資を県が行なうという、画期的な出来事が起っている。小寺弘之群馬県知事（当時）は、4億円の制作費提供と「内容には口を出さない」ことを明言し、同作は1995年秋に完成している⁶⁴。こうした動きを『白痴』製作のモデルケースと判断した齋藤は、『眠る男』の新潟県内2万人動員を宣言し、1996年には「にいがた国際映画祭」及び「ウインド」での半年間の上映、小栗監督・小寺知事の招聘を実現している。結果8000人の動員に留まつたものの、『眠る男』上映運動は大きな話題を巻き起こした⁶⁵。

手塚さんとプロデューサー・古澤敏文氏（1958年生）には、『白痴』製作を単なる「地方での映画撮影」ではなく、市民を巻き込んだ文化活動として盛り上げようという意図があった⁶⁶。古澤氏は「地域の人とコラボレーション（合作）する事を、事前に考えて映画をつくることはできないか」「『白痴』ならできる。むしろ『後腐れのある』関係をつくらないと、この映画はできないと思った。（略）お祭りみたいにみんなが勝手に盛り上がるような、そんなつくり方をしたかった」⁶⁷と語っている。1997年5月10日には『白痴』出演者の一般オーディションが開催され、梅田千代さん（1916年生）、木原大吾さん（1967年生）が重要な役どころでの出演が決定した。また、同年5月には映画の主要舞台及び空襲シーンを撮影するために、県有予定地・美咲町1丁目が有償で貸し出される⁶⁸。

しかし「制作費7億円（増額）の半分を新潟で集める」という目標も、政財界からその言動を快く思われていない齋藤が中心となって提供を依頼した事や、撮影計画の不透明性、“無賴派”と称される坂口安吾へのマイナスイメージがネックとなって、実現には遠かつた。行政への出資依頼も、『白痴』が商業作であり、東京が舞台となる映画の撮影を新潟で行なう事の意義が見えない、と一蹴される。97年8月の資金難による製作延期を経て、98年2月、「手塚プロダクション」が全面出資に乗り出し、金銭的な問題は解決している。1998年5月、『白痴』は新津市ロケでクランクインに到達した。新潟に住み込み、スタッフとして活動する「映像十字軍」と称する若者の全国からの参加、浅野忠信を迎えてのオールナイト上映（6月6日）、美咲町に完成したセットでの、5000人のエキストラを集めてのモップシーン（7月20日）、大規模な爆破を伴う空襲シーン撮影（8月7、12、16日）を経て『白痴』は、1999年3月に完成した⁶⁹。同年10月30日には、東京に先駆けて「ウインド」及び「新潟松竹」でロードショーが行なわれ⁷⁰、「ウインド」では2000年9月までのロングラン上映を実施している⁷¹。

(2) 『白痴』の縁

『白痴』撮影運動を見詰める際に重要なのは、①製作のバックボーンとなった「ウインド」周辺及び、文化活動に取り組んで来た市民の存在、②手塚さんの周辺に派生した市民とのつながりだと考える。

第一点だが、1998年1月、一口1万円で2000人の出資を目指す「アート・サポーターズ」がスタートしている。『白痴』の製作資金及び文化公演の資金への運用を目的とした^⑩この取り組みへの参加者には、映画全盛期を知る人たち、「ウインド」中心メンバー及び支援者、大学教員、「にいがた映画塾」立ち上げに関わった人達が名前を連ねている^⑪。出資者は182人に留まつたが、集まつた金額は問題ではない。広報誌『HAKUCHI 通信』の編集や、手塚さんや坂口安吾に関する講演会・イベントの開催、安吾を愛する全国の人々への支援依頼、「無償」での撮影支援。『白痴』完成までには、新潟で「映画」「文学」「美術」といった文化活動に携わってきた人々が、経験とネットワークを活かしながら大きな役割を果たした。「ウインド」が文化活動に取り組む市民をスタッフ・支援者とし、彼らとのつながりを「アーベバ」のように分裂させてきた事が、ひとつの成果となつたのではないか。

第2点だが、『白痴』に無償スタッフとして関わった人々、観客として同作を楽しんだ人々と、手塚さん・「ウインド」とのつながりは一時では終わらず、新たなネットワークが派生している。一例として、梅田千代さんを紹介したい。梅田さんは、1997年の『白痴』オーディションの際「私は81歳の青春を送っている。きのうと同じ人間ではいけない。少しずつ成長していきたい」^⑫とPRし、「狂人・木枯（草刈正雄）の母」という大役で同作に出演している。所有するアパートをスタッフに無料で貸し出したり、エキストラを人脈を活かして集めたりと、梅田さんは『白痴』撮影の象徴ともいえる存在だった（注6.8に同じ）。この撮影がきっかけとなって、梅田さんは「ウインド」の「周年祭パーティー」において、毎年詩の朗読を担当するようになり、『白痴』完成後も同パーティーを始めとして、定期的に新潟を訪れる手塚さんとの交流が続いている。

梅田さんに限らず、手塚さんと親交を深めた人々の内、「ウインド」や「にいがた映画塾」のメンバーとなつた人は多い。2006年には手塚さんの新作『ブラックキス』公開や、手塚さん企画による「坂口安吾映画祭」^⑬が開かれている。同年、手塚さんは何度も新潟を訪れたが、その度に『白痴』に関わった人々と酒を酌み交わし、撮影当時を振り返っている。またこうした人々によってイベントが運営され、「手塚眞」を核とした新潟市民のつながりは定着したと言える。手塚さんは「ぼくは安吾と新潟にとてもお世話になって、恩がある。微々たることでも、お礼をしなくちゃ」「ふるさとでもないのに、ここ（新潟）へ来るとなぜか懐かしく、ホッとする（略）ホームタウンへ戻ったかのように、寛ぐ。フシギだ。」^⑭と記しているが、手塚さんの誠実さもまた、単なる「映画の地方ロケ」を越えた実りを生み出したのではないか。そして映画界が斜陽を迎えていた1990年代に、無謀にさえ思える大作映画撮影が実現できたのは、「向こう見ずな冒険心」を持つ新潟市民の存在にも要因があった。手塚さんと新潟市民との“縁”は、古澤氏の語る「後腐れのする」映画制作の成果として、評価できるだろう。

2006年10月15日、『白痴』は「坂口安吾映画祭」の一本として、約6年ぶりで「ウインド」のスクリーンに蘇った。ほぼ満席となった劇場では手塚さんによる舞台挨拶、主演俳優・浅野忠信からのメッセージなどが披露されている。同作の2時間30分に渡る上映中、手塚さんは客席後方に佇み、真剣な眼差しでスクリーンを見詰め続けていた。

(3) 「にいがた映画塾」の誕生と現在

『白痴』製作運動が生み出したつながりのひとつが、「にいがた映画塾」である。1996年、古澤敏文氏と、『白痴』撮影運動の中心メンバー・矢部孝男さん（1958年生）は市民に映画撮影のノウハウを伝え

る「映画塾」設立に取り組んでいる。新潟での自主映画撮影は、1960年代末に製作団体が発足し、1979年から10年間、8ミリ映画上映会「にいがた映画祭」が開催されるなど、盛んだった^⑨。ビデオカメラ普及や8ミリ機材の生産中止によって、90年代には壊滅状態となっていたが、『白痴』製作の盛り上げと、新潟の「映像文化」復興を狙って古澤氏・矢部さんは奔走し、1997年1月、第1期「にいがた映画塾」が開講している^⑩。

矢部さんの熱意で同年7月には第2期講座が開講し(注72に同じ)、2006年5月～8月の講座(全10回)で「にいがた映画塾」(以下、映画塾)は第11期を迎えた^⑪。この間、脚本家・荒井晴彦氏、映画監督・篠原哲雄、古厩智之、廣木隆一といった顔触れが講師として参加している。また1997年11月から毎年、「映画塾」及び県内外の自主映画を「監督が来場する事」を条件に上映する「にいがたインディーズムービーフェスティバル」(会場シネ・ウインド)も開催されている。

2006年の第11期「映画塾」では、撮影はビデオ機材に移行し、25名ほどの受講生が参加している(「映画塾」の特徴として、卒業生が中心となって運営が行なわれ、彼らも聴講生として参加し、映画制作を続いている点が挙げられる)。11期「映画塾」は、俳優・小林へろ氏を迎えての演技指導、篠原哲雄監督による撮影実践、各受講生の「撮影企画」プレゼンと多数決によって選抜された作品の制作などで構成された。スタッフも受講生も若い世代が主であり、「市民講座」というより「サークル」的な様相が強いと感じている。

「映画塾」をより発展させるためには、完成作品に対する塾生同士のディスカッションが必要だろう。映画は自分の思いをまとめるだけでなく、多くの人の目に触れ、賞賛や批判を受ける事で完成する。今期「映画塾」でも手塚眞さんを講師に迎え、完成作品の講評を行なう講座や、「インディーズムービーフェスティバル」などは実施された。しかしスタッフや受講生が互いの作品を、後に残る形で批評し合う機会は、恒常化していない。また「映画塾」という組織がそのスタイルによって、塾生とスタッフ間の交流が「講義」と「撮影」に限定されているようにも感じられる。「映画塾」という若さと勢いを持つ団体が厚みを増す為には、その活動が講義という枠を超える必要がある。

手塚眞さんは「東京でも映画館に若い人がでかける事が少なくなったし、自分の会社で映像を製作してくれる若い子も驚くほど映画を観ていない。映画を観なくても、映画を作れるようになっているんだね」と語っている。“総合芸術”映画に取り組む団体であるからには、その歴史や過去の作品群の知識を、塾生たちへ伝えることも大切だろう。「技術」があっても、そこに「魂」がなければ人の心を動かす事はできない。メンバーたちの若さと個性を活かした運営のためには「知識」の伝達と、より「枠」に囚われない塾生への製作支援が必要になるのではないかだろうか。

「映画塾」の塾生たちの姿は「娯楽」や「文化」を自分たちで創り出そうとするスタイルとして、評価できる。活動を傍観させてもらった一人として、よりしなやかに「映画塾」の存在が新潟に根付く事を祈りたい。

終章 「シネコン」登場と現在の映画館状況

(1) シネマコンプレックス登場の余波

「シネマコンプレックス」(略称シネコン)は大規模商業施設に展開し、一箇所に複数のスクリーンがあり、多数の映画を上映する館を指す。アメリカでは、1980年代に登場し、「映画館で観たい映画を選ぶ」という鑑賞スタイルを誕生させた^⑫。かつて街に多くの映画館が存在した時代には、行楽や買物、観たい映画を探す喜びを楽しむ事ができた。「シネコン」は、郊外型商業施設という人工的な“街”で、こうしたスタイルを追体験できる存在といえる。1980年代以降の日本では、大作映画もしくは小規模上映の意欲作など、観

客それぞれが「観たい」と思う映画を選び、劇場へと足を運ぶスタイルが主流であった。「シネコン」の登場は観客に「シネコン」へ行き、家族・恋人との時間や、ヒマをつぶすために「上映されている映画の中から好きなものを選んで観る」という思考を発生させた、と捉えられる。また日本においても「シネコン」が一般化した2000年以降、全国の映画館スクリーン数が、2000スクリーン台後半で推移し、2005年には2906スクリーンと、1970年以来となる3000スクリーン台を目前にしている。しかしその数字を良く見ると、2005年には全数の内、1954スクリーンを「シネコン」が占めている事がわかる（注22に同じ）。大手配給会社作品（ミニシアター系作品も）を大規模上映する「シネコン」は、配給会社系列館や単館上映を行なうミニシアターにとって、存続の障壁となっている。

新潟県初の「シネコン」は燕市（当時）の「ワーナーマイカルシネマズ県央」（1997年開館）であり、同館は開館1年9ヶ月で入場者数100万人を突破している^④。新潟市でも1999年10月、「ユナイテッド・シネマ新潟」が開館し^⑤、以後「ワーナー・マイカルシネマズ新潟」（2000年10月）、「T・ジョイ新潟万代」（2001年7月）と「シネコン」進出が相次ぐ^⑥。こうした動きの余波を受け、新潟市内では既存の映画館が次々と閉館に追い込まれた。2000～2001年だけでも8館が撤退し^⑦、2002年5月の古町「SY 松竹」「新潟ピカデリー」閉館^⑧によって、古町で営業する館は成人映画館「大要映劇」のみとなる。

この内「SY 松竹」は1928年に「新潟松竹館」として開館し（注79に同じ）、70年以上の歴史を持つ老舗館であった。最盛期には1日に2500人もの観客を集め（注79に同じ）、『君の名は』上映時の行列は語り草となっている。しかし他館同様にテレビ・ビデオの普及によって客足は落ちた。さらに「シネコン」進出で、土日の観客数も数十人代へ減少し、閉館に至った^⑨。「SY 松竹」元支配人・荒木春男さんは、「昭和24年（1949年）に『松竹館』へ入社して5年間勤めたから、多くの思い出が映画館と共にある。名画座としても残ろうとしたが…」と、その無念を語っている。

加藤禪郎は「シネコン」が隆盛を極める要因を「映画がテレビに完敗したことのまぎれもない証左である」とし、テレビで観たい番組や買いたい商品を、家に居ながらにして求める事と、「シネコン」で観たい映画を選び、商業施設でショッピングを楽しむ心理には共通性があると分析する^⑩。また「シネコン」の特徴として、同地域の複数館が配給会社に関わらず話題作を公開する点が挙げられる。大手配給社の系列館が、地域に隣接していた頃には考えられない事だ。「シネコン」は、観たい映画や映画館を選んで観るという「映画鑑賞法」を生み出した。しかし、複数館が同作品を上映する事で、地域全体では多彩な映画上映がなされない事態も派生する。その地域に「ミニシアター」や「自主上映」が根付いていなければ、自由に映画を選べるように思える環境が、個性的な作品を「自由」に楽しめない環境にもなってしまう。現在の新潟市では年間200本強の映画が劇場公開されているが、約半数は「ウインド」一館が担っている。「シネコン」は、観客の選ぶ喜びを充たす存在とは言い切れない。「シネコン」による選ぶ楽しみと、既存映画館やミニシアターの個性を感じる上映が共存する事で、観客は映画作品を選ぶ喜びを満喫できるのではないかだろうか。

（2）2006年現在の新潟市映画館状況

2006年現在、新潟市の映画館数は5館（27スクリーン）となり、「シネコン」以外で上映しているのは「シネ・ウインド」と「大要映劇」のみである。一見、運営方針の大きく異なる館と「シネコン」が共存している様に思えるが、近年では「シネコン」でも「ミニシアター系」と呼ばれる小規模製作の作品を上映するケースが増え、作品決定に関するトラブルや、争奪戦が起っている。また2007年、新潟市亀田地区に建設されるショッピングセンター内へ、新たな「シネコン」が開館する。新潟という地方都市に4館もの「シネコン」が林立する状況が、各映画館の生存競争や、客足の市街地への分散など懸念を生じさせている。

新潟市内の映画館史を見ても、他館との競合・トラブルは付き物だった。現在の競合も、歴史のひとつと言一切る事はできる。だが映画は「商業」でありながら、人に生きる力を与える芸術・娯楽として的一面を持っている。1本の映画によって道を見付け、自己実現の糧とする人々は絶えていない。映画を「商業」とだけ認識し利益を得ても、長い眼で見れば地域にもたらす損失は大きい。全国でも郊外型「シネコン」によって市街地の映画館が閉館に至った地域として、群馬県前橋市・徳島県徳島市があげられる。そして人々で賑わっていた古町から、多くの映画館が姿を消した事、月岡哲郎さんの「ひとつの映画館が消滅する事は、そこに付随する記憶や、地域の生活までが無くなる事」という言を思い出して欲しい。これから映画上映では「商業性」や「芸術性」「娯楽性」、そのいずれかに偏らない柔軟な運営を各館が行ない、連携を生み出す必要があるだろう。個性を各館が打ち出し、共助しなければ、結局映画業界は衰退してゆくのではないだろうか。

また「ウインド」齋藤正行代表は、新たな構想を発表している。「ウインド」や「にいがた映画塾」「にいがた国際映画祭」など、新潟で「映画」を媒介とした文化事業を実施している団体間の連絡を強化し、より柔軟な映画上映を行なうための連合体である「にいがたコミュニティシネマ」の設立である。前記した3団体に加え、新潟県内の映画ロケーション誘致・撮影援助を行なうNPO「にいがたロケネット」(2003年設立)⁶⁹など、新潟市内では「映画による文化振興」に取り組む団体が多い。他の都市と比較して映画による市民活動が継続している新潟だが、各団体間の運営協力は確立されていない。またそれぞれの団体には新たなメンバーが加入しているが、その成り立ちや他団体に関する知識の伝達も、うまく果たされているとはいえない。各「映画団体」が全く別の方向を向き、自分たちの過去や共に「文化振興」に取り組む人々への興味を持たなかつたら、その活動は脆弱となるかもしれない。2006年中の設立を予定していた「にいがたコミュニティシネマ」だが、現時点では開設には至っていない。

新潟に古くから根付いている「文化振興」を、よりしたたかな存在へと成長させるためには、その運営者たちが互いを知り、協力し合う事が必要だろう。「ウインド」や「映画塾」「国際映画祭」スタッフ間の交流・共同作業などが生まれている現在の状況を継続させる事が、やがて強い支柱になると思う。

(3) おわりにかえて

ここまで新潟市内を中心とした映画上映の変遷と、映画と歩んだ人々の姿をたどってきた。映画は1889年のエジソン研究所による覗き眼鏡スタイルでの開発(キネトスコープ)⁷⁰、1895年のリュミエール兄弟の投写式上映発明⁷¹と、個と群、二様の性質を持って誕生した。現在ではビデオ・DVDの普及や、快適さ・静寂さを求めるシネコンなど「個」としての映画上映が主流になる一方で、映画によって人と人がつながる「群」の映画上映も息づいている。どちらかが正しいという事はない。街には多様な個性を持った人々が集い、交じり合う事で“猥雑さ”が生まれてくる。新潟は、他の地域と比較しても「シネコンの密集」と「映画による文化振興」が共存する稀有な特徴を持っているだろう。

なぜ、人は「映画」を観るのか。それを考えるためには、映画も「見世物」である事を認識する必要がある。小沢昭一は「『見世物』においては、みせるものが、まず珍しいということ、普通世間一般では、あまりみかけることのできない、稀なものでなければならない」「すべて、みせることによってお金をとってよろしい。天性の資質も、習練によって獲得したものも、ともに、一般を抜きんぐことによって“みせるもの”として価値あるものだ。むずかしい理屈や、高邁な理想や、社会改革への情熱とやらは、それだけでは、“みせるもの”としてはゼニがとれない」⁷²と、「見世物」を定義している。映画には人々の様々な情熱が込められている一方で、観客に日常の憂さを忘れさせ、明日への力を与える娯楽としての性質を持っている。ひとりで、親しい人と、劇場へ足を運ぶ。観も知らぬ国・土地の風景に溶け込み、自分とは異なる人生を体験する…。「映画館」とは枯れたエネルギーを充満させ、日常へと戻ってゆくハレの場が都市に定着したものと私は捉える。

映画の衰退が叫ばれ、個人の娯楽が発展しても映画がハレの場としての要素を失わない限り、映画を守ろうとする市民は生まれ続けるはずだ。

こうした起源を忘れ、映画による文化振興に取り組む人々が、“むずかしい理屈”や“高尚な理想”“社会改革の情熱”だけに囚われてしまったら、どうなるだろう。また興行に携わる人々が、利益を重視して「歴史」を忘れ、新しいものにだけ目を向けている状況もある。『新潟県映画館史』発行を決めた齋藤正行は、「大袈裟に言うと、過去を知らなければ未来も見えてこないものです。過去に新しいものを発見することができます。そして、将来のビジョンがやっと描けるはずです」⁽⁴⁾と、記している。「映画上映史」を振り返る事で、私は文化活動に取り組んできた人々が「遊びながら」映画上映に向き合ってきた事が見えてきたと思う。人間が本能的に持っている「楽しみたい」という想いが、「映画上映」を支えてきたのではないか。娯楽を求め、実現しようという想いが、やがて理想へつながる。ここまで紹介してきた新潟で「映画上映」に取り組んだ人々は、「遊び」を、意志とつながりによって実現してきたといえる。

「シネ・ウインド」における映画上映の試みについて、齋藤正行は手塚眞監督による「坂口安吾映画祭」プロデュースなどを例に挙げて、以下に記している。「手塚眞監督の発案で、（中略）安吾原作の五作品を新潟から東京への上映会が行なわれました。（中略）まるで、手塚さんの『シネ・ウインド』化していました。二十一年祭は久志田さん化。女性映画祭は小池さん化。皆さん自分の劇場の如く、楽しんでくれたようです。それは一つの理想です。今年も風のように貴女が現われ、新しい企画が実現していくのでしょうか」（注86に同じ）。この小さな文章が、「シネ・ウインド」の目指す“理想”を象徴している様に、私には思える。何かを実現したいと思う市民が「ウインド」という空間で、その運営を「自由」に任せられ、遊びながら自己実現を図る。「ウインド」が、21年間この想いを掲げ続け、実現しようとしている事は評価できるだろう。そして今も“何かをしたい”と願う人々が「ウインド」を訪れる状況は続いている。

人が街へ出かけ、つながりを築きながら何かを実現する。こうした欲求は絶えず人の心にあるはずだ。しかしそうした機会を与えてくれる「場」や「人」が減少しているのも事実だろう。現代を生きる人々の中には、人とのつながりを生み出す場を見出せず、ごく狭まった範囲を社会と認識している場合もある。新潟で映画上映による交流を生み出し続けている人々は、孤独を抱えた魂を受け入れる「場」として、今も存在している。こうした「場」を発展させ、足を踏み入れたいと願う人々を迎え入れ続ける事には意義がある。新潟に根付く映画を媒介とした人々の輪は、それを求める人がいる限り、街に猥雑さと個性を生み出し続けるだろう。

註

- (1) 加藤韓郎『映画館と観客の文化史』
- (2) 佐藤忠男『日本映画史』第3巻
- (3) 『映画館と観客の文化史』
- (4) 中沢敬子「新・映画にオペラを探したら」第35回
- (5) 『日本語大辞典』
- (6) 『新潟県史 通史』第7巻 P819
- (7) 『新潟市パノラマ館』 P141
- (8) 「県民書き書き帳 カツドウ館60年」
- (9) 長谷川潔さんの証言
- (10) 『映画館と観客の文化史』
- (11) 『日本映画史』第1巻
- (12) 野坂恒如「コレがた映画館物語」

- (13) 『日本映画史』第1巻
- (14) 「にいがた映画館物語」
- (15) 『新潟県映画館史』編集部作成年表
- (16) 月刊ウインド2005年9月号 特集「素晴らしき哉、名画座ライフ」
- (17) 新潟日報「県都の名画座ライフ『お葬式』とともに去る」
- (18) 『日本映画史』第3巻
- (19) 『新潟県年鑑』1964年版
- (20) 『グランド劇場25年の歩み』
- (21) 『映画館と観客の文化史』
- (22) 社団法人日本映画製作者連盟ホームページ
- (23) 『日本映画史』第3巻
- (24) 阿奈井文彦著『名画座時代』
- (25) 新潟日報「また消えたシネマの灯」
- (26) 高野悦子編『エキップ・ド・シネマの三十年』
- (27) 『新潟県年鑑』1974年版
- (28) 『新潟県年鑑』1987年版
- (29) 「近ごろニイガタ自主上映事情」
- (30) 上越映画監賞会ホームページ
- (31) 『新潟県年鑑』1980年版
- (32) 『新潟県史』通史編 第8巻 P493
- (33) 岩波ホール 1981年12月5日～1982年3月19日
- (34) 萩昌弘「萩昌弘の週間映画館～ライフ開館～」
- (35) 「シネ・ウインド」及び新潟市内外の文化活動を紹介する雑誌。「ウインド」スタッフによって編集が行なわれ、2006年8月、通巻250号を達成した。製作長・市川明美 編集長・平淳一郎
- (36) 各映画上映終了後、観客を退場させ次回の観客を入場させる上映方式。新潟市内では「シネ・ウインド」が初めて実施した。
- (37) 1987年、新潟市内を中心に坂口安吾の顕彰を目的として発足した団体。会報「安吾緑報」発行や講演会・読書会の開催などに取り組んでいる。世話人代表・齋藤正行
- (38) 『映画が街にやって来た』P19 「おまえがやっていることは、アメーバの新陳代謝なんだな。上下がないし、ヌアーッと浸透していくって、核が一つではなくみんなが独立した核を持っている」
- (39) 小林久三「空中試写室」キネマ旬報1986年1月下旬号
- (40) 新潟日報「いま県内映画館は」
- (41) 新潟日報「新潟ロッポニカ23日ついに終幕」
- (42) 『新潟県年鑑1991年版』
- (43) 新潟日報「いま県内映画館は」
- (44) 『月刊ウインド』1998年11月号 特集「GO! GO! HOGA-BIN」
- (45) 「シネ・ウインド」ホームページ内「HOGA-BIN@CINEWIND」
- (46) 『月刊ウインド』2005年11月号 特集「思えば大ぜい来たもんだ」
- (47) 『月刊ウインド』1996年4月号「ウインドは2000年に15歳になる」①
- (48) 「イツツ・オンライン・シネマトーク」 映画監督・廣木隆一、脚本家・荒井晴彦、映画プロデューサー・森重晃を招い

- てのオールナイト上映会。
- (49) 朝日新聞「いつか新潟をカンヌのように 市川栄さん」
- (50) 「にいがた国際映画祭」ホームページ
- (51) 『新潟県年鑑』1966年版P309
- (52) 「戦艦ポチョムキン公開に期待するもの」新潟日報
- (53) 「戦艦ポチョムキン上映始末記」新潟日報
- (54) TEZUKA OSAMU@WORLD
- (55) 坂口安吾『白痴 青鬼の褲を洗う女』
- (56) 『映画が街にやって来た』P12~16
- (57) 同上 P11~12
- (58) 同上 P27~28
- (59) 同上 P29
- (60) 同上 第1章
- (61) 同上 P33~34
- (62) 同上
- (63) 同上第2章~3章
- (64) 同上P267
- (65) 『月刊ウインド』2000年9月号
- (66) 『映画が街にやって来た』P106~108
- (67) 同上 P269~270
- (68) 同上 P167~170
- (69) 坂口安吾生誕百年祭と連動して、新潟・東京2会場で、安吾原作の映画作品5本を上映した映画祭
- (70) Tezuka Makoto' 6D 手塚眞ブログ
- (71) 『映画が街にやって来た』P30~32
- (72) 同上 P33~45
- (73) 「にいがた映画塾」ホームページ
- (74) 『映画館と観客の文化史』P151~168
- (75) 『新潟県年鑑』1999、2001年版
- (76) 『新潟県年鑑』2001年版
- (77) 『新潟県年鑑』2002年版
- (78) 『新潟県映画館史』編集部作成による年表
- (79) 「“街の灯”ラストシーン」新潟日報 2002年3月29日
- (80) 「新潟松竹 2映画館 5月閉鎖」日本経済新聞
- (81) 『映画館と観客の文化史』P154~158
- (82) 「にいがたロケネット」ホームページ
- (83) 『映画館と観客の文化史』P46~53
- (84) 『日本映画史』第1巻P6
- (85) 小沢昭一『私は河原乞食・考』P99~104
「『見世物』についての断片的な考察」
- (86) 『月刊ウインド』2007年1月号「新年のごあいさつ」

参考文献

- 『新潟県年鑑』1947年～2002年版 新潟日報社発行
加藤幸輔著『映画館と観客の文化史』2006年 中央公論新社
小沢昭一著『私は河原乞食・考』2005年 岩波書店
『ものがたり 芸能と社会』1998年 白水社
佐藤忠男著『日本映画史』1～4巻 1995年 岩波書店
「白痴」の記録編纂委員会『映画が街にやって来た』1999年 新潟日報事業社
手塚眞と白痴プロジェクト著『白痴』2000年 セブンレッドマーキュリー
網野善彦著『無縁・公界・楽 日本中世の自由と平和』1996年 平凡社
神崎宣武著『盛り場の民俗史』1993年 岩波書店
阿奈井文彦著『名画座時代』2006年 岩波書店
野坂恒如「こいがた映画館物語」新潟日報 1986年6月10日～7月22日
「近ごろニイガタ自主上映事情」新潟日報 1983年3月30日～4月12日
熊谷和宏編・著 渡辺道雄監修『グランド劇場25年の歩み』2002年 自主出版
ヴァルター・ベンヤミン「複製技術時代の芸術作品」
『ベンヤミン・コレクションI 近代の意味』所収 1995年 筑摩書房
高野悦子編『エキプ・ド・シネマの三十年』2004年 講談社
荻昌弘「荻昌弘の週間映画館～ライフ閉館～」新潟日報 1985年3月2日
小林久三「空中試写室」キネマ旬報 1986年1月上旬、下旬号
坂口安吾『白痴 青鬼の禪を洗う女』1989年 講談社
新潟・市民映画館監賞会『月刊ウインド』
1996年4月号 連載「ウインドは2000年に15才になる」
1998年11月号 特集「GO! GO! HOGA-BIN」
2005年9月号 特集「素晴らしき哉、名画座ライフ」
2005年11月号 特集「思えばおせい来たもんが」
2006年6月号 中沢敬子「新・映画にオペラを探したら」第35回
2007年1月号 斎藤正行「新年のごあいさつ」
梅津忠夫監修『日本語大辞典』1995年 講談社
『新潟県史』通史編 第7、8巻
「戦艦ボロムキンに期待するもの」新潟日報 1959年7月11日
「戦艦ボロムキン上映始末記」新潟日報 1959年7月22日
「また消えたシネマの灯 北都映劇と山ノ下劇場」新潟日報 1976年9月1日
「県都の名画座ライフ『お葬式』とともに去る」新潟日報 1985年2月18日
「新潟ロッポニカ23日ついに終幕」新潟日報 1989年1月16日
「いま県内映画館は」新潟日報 1991年6月3日～6月18日
「いつも新潟をカンヌのように 市川栄さん」朝日新聞 1991年1月13日
「“街の灯”ラストシーン」新潟日報 2002年3月29日
「新潟松竹 2映画館 5月閉鎖」日本経済新聞 2002年3月27日
久志田涉「ここに来れば、誰かがいて何かが始まる」映画芸術 2005年秋号
新潟・市民映画館シネ・ウインドホームページ

<http://wingz.co.jp/cinewind/>
Tezka Makoto'6D 手塚眞ブログ
<http://tzk.cocolog-nifty.com/>
ネオンテトラホームページ
<http://www.neontetra.co.jp/>
TEZUKA OSAMU@WORLD
<http://www.tezuka.co.jp/>
社団法人日本映画製作者連盟ホームページ
<http://www.eiren.org/>
上越映画監賞会ホームページ
<http://web01.joetsu.ne.jp/~keinet/j-eikan/pc/index.html>
にいがた国際映画祭ホームページ
<http://www.info-niigata.or.jp/~eigasi/japan/index.htm>
にいがた映画塾ホームページ
<http://www.n-eigajuku.com/>
新潟市国際交流協会ホームページ
<http://www.pavc.ne.jp/~nigie/>
コミュニティシネマ支援センターホームページ
<http://www.jc3.jp/>
長岡アジア映画祭ホームページ
<http://www.mynet.ne.jp/~asia/>
シネマチャオホームページ
<http://www.cinemaciao.co.jp/>
にいがたロケネットホームページ
<http://www.niigatalocation.net/>
シネマテークたかさきホームページ
<http://www5.wind.ne.jp/tcc/>
深谷シネマ チネ・フェリーチェホームページ
<http://www.fukayacinema.com/>
尾道に映画館をつくる会
http://www.geocities.jp/cinema_onomichi/

謝辞

本論の作成にあたって、いつも励ましと叱咤をくれた「シネ・ウインド」齋藤正行代表、「シネ・ウインド」の仲間たち、「安吾の会」「にいがた映画塾」「新潟映画研究会」の皆さん、福島市男さん、手塚眞監督、本文中に登場する皆さん。そして2007年1月3日に急逝された映写技師・江村隆芳さん(享年68歳)に、心から敬意と感謝を表します。また卒論作成を見守ってくれた神田より子先生、加納実紀代先生、ゼミの仲間たち、本当にありがとうございました。

(卒業論文指導教員 神田より子 加納実紀代)